

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	井上昌善
2. 審査委員	主査：（岡山大学教授） 桑原敏典 副主査：（鳴門教育大学教授） 梅津正美 委員：（鳴門教育大学教授） 西村公孝 委員：（兵庫教育大学教授） 吉水裕也 委員：（岡山大学教授） 松多信尚
3. 論文題目	民主的な議論に基づく中学校社会科授業構成の方法に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻社会系教育連合講座 井上昌善から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記の通り審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成30年2月19日（月）15時10分～16時00分 場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス演習室3</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>（1）論文の構成</p> <p>序章 本研究の意義と目的</p> <p>第一章 社会科教育内容開発研究の課題</p> <p>第二章 授業構成における議論の位置づけと役割</p> <p>第三章 社会科教育における民主的な議論</p> <p>第四章 民主的な議論を取り入れた社会科授業構成の原理と方法</p> <p>第五章 民主的な議論を取り入れた社会科単元開発（1）—主張の根拠の反省を原理とする社会科授業—</p> <p>第六章 民主的な議論を取り入れた社会科単元開発（2）—主張への同意の調達を原理とする社会科授業—</p> <p>終章 本研究の成果と課題</p> <p>（2）論文の概要</p> <p>本研究は、従来の中学校社会科授業構成論についてその特質と課題を明らかにしたうえで、それらの課題を克服し得る授業構成原理を明らかにしようとするものである。</p> <p>従来の社会科授業構成論については、それらが、主に教師と学習者との関係から授業を捉え、教師の指導を中心に授業構成の原理が構想されてきた点と、授業モデルが教授書で示されるため、教師と学習者との関係は読み取れるものの、学習者同士の関係は読み取りにくいものであるという点の二つの課題が指摘されていた。本研究は、こうした問題意識に基づいて、民主的な議論を原理とする授業構成の方法を、具体的な単元開発を通して提案しようとするものであり、それによって教育現場の実践的課題の克服を目指した。</p>

本研究の成果として、次の三点を挙げるができる。第一に、政治学の研究成果をふまえ、市民的資質について検討し再定義を行い、具体的な社会科授業構成の方法を示した点である。民主的な議論に基づく中学校社会科授業は、熟議民主主義に基づく議論を取り入れた授業と闘技民主主義に基づく議論を取り入れた授業の二つに分類できた。前者の主張の根拠の反省を促す社会科授業は、他者との違いを認識、自覚化することによって、他者とは異なる自分の意見を形成することを促すことを目指した。後者の主張への同意の調達を促す社会科授業は、他者との違いを保持しつつ、自己の意見を修正していくことで、他者の意見を取りまとめ社会を形成する方向へ向かうことを目指した。この両者を生徒の実態に応じて組み合わせることによって、民主的な議論に参画できる生徒を育成できることが明らかになった。

第二に、学習者同士の関係を重視した授業構成の原理を示した点である。従来の社会科授業構成論では、教師と学習者の関係が重視されていた。つまり、教室では、権威を持つ教師が学習者に働きかけるという環境が、授業構成の前提となっていた。このような環境では、教師から学習者へと一方的に知識が伝達される。民主主義社会の形成者を育成する社会科授業は、学習者である生徒の発言を中心として展開されるべきであり、そのためには生徒同士がどのような関係を授業の中で構築しているのか、つまり、学習者の議論の過程に着目して授業構成を検討することが重要である。本研究で提案した授業構成は、以上のような問題意識に基づいて提案されたものである。

第三に、社会科授業における議論の具体的な指導方法について明らかにした点である。従来の議論に着目した社会科授業構成論では、単元や授業の展開を示す授業構成の理論は示されていても、具体的な議論の指導法までは明らかにされていなかった。つまり、議論の過程において学習者同士がどのような関係を構築していったのかを検討する視点が欠如していたのである。本研究では、議論の具体的な指導方法を明らかにすることで、教育現場の実践的な課題に応えることができた。

2. 審査経過

本研究の意義は、従来の社会科授業構成論が教師と生徒の関係から主に構築されていたのに対して、生徒同士の関係に注目し、生徒の民主的な議論の過程として社会科授業を再構築しようとした点にある。

公聴会では、中学生を対象とする授業理論としての妥当性やこれまでの提案されてきた意思決定論や合意形成論との違いについて質疑応答がなされた。また、本研究で提案する授業が育成しようとする生徒の具体的な姿や、開発単元の中で見られる地域との連携の在り方についても質疑応答がなされた。

審査委員会においては、研究の目的や方法から、論文の構成に至る様々な質問が審査委員から出された。目的に関しては、民主的な議論に基づく社会科と地理の学習の間の関係や、政治学の成果に基づいて授業構成論を構築していくことの妥当性に関する質問があった。また、方法については、実証的な研究を目指すという目的に対して検証の方法や収集したデータが十分であったかどうか、開発単元を中学校社会科の三つの分野の内容に基づくものにしたことの妥当性が問われた。論文構成については、先行研究の検討の論文構成上の位置づけについての疑問や、提案した二つの授業構成論の優劣に関する質問が出された。いずれの質問や意見に対しても、井上昌善は的確かつ丁寧に回答した。審査員からは、現職の教員としての課題意識に基づく学術的にも意義ある論文を完成させたことと、論旨が極めて明確であるという点が高く評価された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、井上昌善の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。